

## 六朝詩における異民族の描かれ方

—「蛮夷戎狄」および「虜」を中心に—

佐伯雅宣

### はじめに

『礼記』王制に「中国戎夷、五方之民、皆有其性也。不可推移。東方曰夷。……南方曰蛮。……西方曰戎。……北方曰狄」（中国 戎夷、五方の民、皆な性有るなり。推移す可からず。東方を夷と曰ふ。……南方を蛮と曰ふ。……西方を戎と曰ふ。……北方を狄と曰ふ）とあるように、古来、中華の東方には「夷」、南方には「蛮」、西方には「戎」、北方には「狄」という異民族<sup>〔1〕</sup>がいるという。また『礼記』曲礼下には「東夷」「北狄」「西戎」「南蛮」の語も見られる。しかしその他の文献を検証してみると、必ずしも方角とこれら異民族の名称は一致しない。『楚辞』や漢代の文には「南夷」「西夷」「北夷」、また「西蛮」「北蛮」の語が見られる<sup>〔2〕</sup>。

白鳥庫吉は「周代の戎狄に就いて<sup>〔3〕</sup>」において、蛮夷戎狄はそれぞれもとは一定の場所にいた一定の種族を指していたものが、のちに（戦国時代以降）広く異族をい

う汎称となったとし、それを当時（戦国→秦漢）の学者が陰陽五行の理論に基づいて四方に配当したのだと指摘する。また白鳥は同論文において、蛮夷が先に汎称となり、それに遅れる形で戎狄も汎称となったとも述べている。

その他、異民族の汎称としては「胡」や「虜」があるが、「胡」が単に異民族のみならず、北方の地や広く異国を表す語として多岐にわたって用いられる<sup>〔4〕</sup>のに対し、「虜」は大半が戦うべき敵としての異民族を指す傾向がある。

そもそも異民族は、中華の人々にとっては外辺にあって自国の安全を脅かす寇敵である。しかし逆にそれらを慰撫することで天子や王の大いなる威徳を表すことにつながることもあり、漢代の賦などでは「蛮夷戎狄」の語を用いてそのような描かれ方をすることが多い<sup>〔5〕</sup>。

しかし六朝時代になると状況は大きく変わる。五胡の侵入、晋の東遷から始まる戦乱の中、とりわけ南朝の人

々にとつて異民族はまさに自国の寇敵であり脅威であった。そのような異民族を六朝詩人たちはどのように詩に詠んでいたのだろうか。

本稿では、「蛮夷戎狄」および敵なる異民族の汎称として多用される「虜」の語を中心に、六朝詩における異民族の描かれ方についていささか検討を加えたい。

### 一 漢代の詩

まず六朝に先立つ漢代の詩における「蛮夷戎狄」の例を見てみる。

「安世房中歌十七章・其十三」（『漢書』礼楽志）

蛮夷竭歛

蛮夷歛を竭し

象来致福

象来りて福を致す

漢武帝「柏梁詩」（『芸文類聚』卷五六）

蛮夷朝賀常会期

蛮夷の朝賀 常に期に会す（典属国）

白狼王・唐菽「遠夷慕德歌」（『後漢書』西南夷伝）

蛮夷貧薄

蛮夷は貧薄にして

無所報嗣

報嗣する所無し

願主長寿

願はくは主の長寿にして

子孫昌熾

子孫昌熾ならんことを

白狼王・唐菽「遠夷慕德歌」（『後漢書』西南夷伝）

蛮夷所处

蛮夷の処る所は

日入之部

日入るの部

慕義向化

義を慕ひて化に向ひ

蜃日出主

日出づるの主に帰す

これらの詩では「蛮夷」の語が用いられているが、いずれも懐き従い、漢朝の徳を喜ぶ存在として詠われる。

これは遠方の異民族の汎称であり、特定の方角を意識している様子は見られない。また「白狼」「唐菽」は、西南夷（蜀の塞外にあった異民族）の種族であり、漢の教化を慕って帰属し、これらの歌を作ったという。よって「蛮夷」とは異民族が自らを言うことになるが、これらの詩は異族の言葉であったものを漢語に訳させたとされており、元はどのような意味の語であったかは定かではない<sup>〔6〕</sup>。

漢武帝「西極天馬歌」（『史記』樂書）

承靈威兮降外国

靈威を承けて外国に降り

涉流沙兮四夷服

流沙を涉りて四夷服す

漢武帝「柏梁詩」（『芸文類聚』卷五六）

和撫四夷不易哉

四夷を和撫する 易からざる哉（大將軍）

「郊祀歌十九章・惟泰元」（『漢書』礼楽志）

招搖靈旗

招搖の靈旗のもと

九夷賓將 九夷賓將す

「郊祀歌十九章・天馬」(『漢書』礼楽志)  
天馬徠 從西極 天馬徠る 西極從りす  
涉流沙 九夷服 流沙を涉り 九夷服す

「四夷」と言い、「九夷」と言うが、「四夷」は四方の異民族、「九夷」は数多くの異民族の意であり、いずれも特定の方角を意識した語ではない。中華の外辺にある異民族の汎称である。「柏梁詩」では「和撫」しがたい存在として詠われるが、その他の詩では「蛮夷」の例と同様、漢に従い服しており、朝廷の威徳を示すことにつながる。

その他の描かれ方には以下のような例がある。

韋玄成「自効詩」(『漢書』韋玄成伝)  
誰將遐征 誰か將に遐く征かんとせば  
從之夷蛮 從ひて夷蛮に之かん

この韋玄成の詩の「夷蛮」は、先の「蛮夷」とは異なり、都から遠く離れた辺地を指す。おそらく異民族がいるような地という意味であろう。

「安世房中歌十七章・其十三」(『漢書』礼楽志)  
嗚呼孝哉 嗚呼孝なる哉

このように見えてくると漢代の詩では「蛮夷戎狄」のうち「蛮」「夷」の例が比較的多く、とりわけ皇帝の御製や郊祀歌などの雅楽において「蛮夷」「四夷」「九夷」などの語が異民族の汎称としてよく用いられている。これらの異民族は漢に服し、慰撫される存在として詠われており、漢朝の威徳を示すものとなっている。そして「蛮」「夷」が汎称として多用されているのに対し、「狄」は先に述べたように一例のみであり、「戎」についてもその数は少なく、異民族の汎称として用いる例は見られない。また漢代の詩に「虜」も見られないが、それは征伐すべき敵としての異民族を詠うことがないことも関連するであろう。

## 二 三国・西晋の詩

後漢末から三国・西晋にかけては「蛮」「夷」の他、「戎」「狄」「虜」を用いる例が増えてくる。

### (1) 蛮・夷

従来と同じように朝廷の威徳に服する異民族の汎称として用いられることも無論あるが、一方で以下のような例が見られる

韋昭「吳鼓吹曲十二篇・関背徳」(『宋書』樂志四)  
虜羽授首 羽を虜にし首を授け  
百蛮咸来同 百蛮咸な来同す

案撫戎国 戎国を案撫す

古辞「折楊柳行」(『宋書』樂志三)  
戎王納女樂 戎王女樂を納れ  
以亡其由余 以て其の由余を亡せしむ

「安世房中歌・其十三」においては「戎国」という特定の異民族あるいは国を指すと思われる語が用いられているが、王先謙補注によれば、高帝が西に都(長安)を置き、先に西方を慰撫したために「戎」と言ったのだという<sup>[8]</sup>。つまり王先謙は、「戎」西方異民族と捉えていることが分かる。また「折楊柳行」は、『史記』秦本紀にある、秦の繆公が、西戎の王に女樂を贈ること王の心を乱し、その賢臣由余を秦に亡命させたという故事を踏まえたものである。つまりこれらの「戎」はいずれも西方の異民族を指している。

張衡「同声歌」(『玉台新詠』卷一)  
灑掃清枕席 灑掃して枕席を清め  
鞞芬以狄香 鞞芬狄香を以てす

この詩の「狄香」について吳兆宜は「外国之香」と注するが、これだけでは特定の異民族を指すのか、異民族の汎称であるのかは定かではない。「狄」が漢代の詩に確認できるのはこの一例のみである<sup>[9]</sup>。

韋昭「吳鼓吹曲十二篇・通荆門」(『宋書』樂志四)  
蛮夷阻其陰 蛮夷其の陰を阻て  
歷世懷不賓 歷世不賓を懷く  
……(略)……  
荒裔望清化 荒裔清化を望み  
化恢弘 化恢弘たり

「吳鼓吹曲・関背徳」は、関羽が呉の徳に背いたことを詠うものであり、ここに引用した部分は関羽が捕らえられ首をはねられたこと、それにより「百蛮」が呉に帰服したことをいう。ここにいる「百蛮」とは、荊州にあった異民族を指すと考えられる。『後漢書』南蛮列伝によれば、荊州のあたりには武陵蛮、零陵蛮、長沙蛮といった異民族があり、しばしば後漢に対して反乱を起こしていた。なお「百蛮」は漢代の詩には確認できないが、賦や文にはしばしば見られ<sup>[10]</sup>、その大半が天子に従う多くの異民族の意で用いられている。

また「吳鼓吹曲・通荆門」では、盟を結んでいた呉と蜀が戦いを交えることとなり、それに乘じて異民族が乱を起こすが、最後には呉の徳化によつて服したことが詠われる。「蛮夷」の語は漢代の詩にも見られるが、ここでは荊州にあつて蜀に通じた異民族を指す。『三国志』呉書・孫権伝によれば、劉備は呉との戦いに際して、武陵蛮に官印を与えて報奨を約束し、蜀の味方に付けている。結

果的に劉備は敗れたため、蜀に従っていたこれら武陵蛮も呉に帰順したのであろう。

すなわちこの「百蛮」「蛮夷」は不特定の異民族ではなく、実際に起こった状況を反映し、ある地域の具体的な異民族（荊州の武陵蛮等）を指している。最終的には朝廷の徳に服した点が共通していることもあり、漢代の詩賦では懐き従う異民族の汎称であったこれらの語を用いたものと思われる。ただし「蛮」字を用いるのはやはりその地が荊州であることも大きいであろう。漢代の詩の「蛮」に方角性は見られなかったが、もとは『礼記』に言うように南方の異民族を意味する語であり、『毛詩』小雅・采芑の「蠢爾蛮荆、大邦為讎」（蠢爾たる蛮荆、大邦を讎と為す）から、とりわけ荊州のイメージが強い。そして呉の人にとっても荊州は「蛮」であったことが分かる。

王粲「魏兪兒舞歌四篇・矛兪新福歌」（『宋書』樂志二）  
漢初建国家 漢初 国家を建て  
匡九州 九州を匡す  
蛮荆震服 蛮荆震服し  
五刃三革休 五刃三革休む

この王粲の「兪兒舞歌」は魏の建国に際して、太祖廟で奏でられたものである。ここでいう「蛮荆」は、漢の建国時に最大の敵であった項羽が治める楚の人々を指す

爾之帰蕃 爾の蕃に帰らば  
作式下国 下国に式と作らん  
無曰蛮裔 曰ふ無かれ蛮裔として  
不虔汝徳 汝の徳を虔まずと

この詩では、士孫文始の封地である澹津（湖南省常德市）を「蛮裔」という。すなわち王粲にとってなじみのない都から遠く離れた南の地を指す場合に「蛮」を付していることが分かる。

曹植「朔風詩」（『文選』卷二九）  
凱風永至 凱風の永かに至りて  
思彼蛮方 彼の蛮方を思ふ  
願随越鳥 願はくは越鳥に随ひ  
飜飛南翔 飜飛して南に翔らん

またこの曹植の詩には「蛮方」の語が用いられるが、これは『毛詩』大雅・抑の「用戒戎作、用邊蛮方」（用て戎の作るを戒めよ、用て蛮方を邊けよ）を踏まえたものである。『毛詩』では遠方の異民族の侵入を遠ざけることを詠うが、曹植の詩ではただ遠く南の地を「蛮方」といい、自分もそこに行きたいと詠う。

すなわちこれら「蛮」が付された語は、異民族を指すのではなく南方の僻地という意味で用いられる。自分または他者が赴く辺地に「蛮」を用いるのは、漢の韋玄成

と考えられる<sup>11</sup>。楚は長江中流域、荊州あたりの旧国名であることから、『毛詩』を踏まえつつ侮蔑的な意味を込めて「蛮荆」と呼んだのであろう。これは必ずしも異民族ではなく特定の地域の人々（楚人）を念頭に置いた語であるが、やはり最後には朝廷の徳に服従している。また同じく『毛詩』小雅・采芑を踏まえたものではあるが、次の詩ではやや意味が異なる。

王粲「七哀詩二首・其一」（『文選』卷三三）  
復棄中国去 復た中国を棄てて去り  
遠身適荆蛮 身を遠ざけて荆蛮に適く  
（李善注）毛詩曰、蠢爾蛮荆。毛萇曰、蛮荆、荊州之蛮也。

王粲「七哀詩二首・其二」（『文選』卷三三）  
荆蛮非我郷 荆蛮は我が郷に非ず  
何為久滯淫 何為れぞ久しく滯淫せん

王粲はこれら「七哀詩」において、異民族ではなく荊州という地を指して「荆蛮」と呼ぶ。この詩は王粲が都の戦乱から逃れ荊州にやって来たことを詠うものであるが、それまで都にあった彼にとって南の荊州は「蛮」なる地であったのだろう。さらに王粲には次の詩もある。

王粲「贈士孫文始」（『文選』卷三三）

の詩に「夷蛮」の語ですで見られるが、三国時代に顕著であり、さらに荊州など南方を意味することが増えたと言えよう。  
続いてこの時代の特徴の一つとして、次のような例がある。

王粲「從軍詩五首・其三」（『文選』卷二七）  
從軍征遐路 軍に従ひて遐路を征き  
討彼東南夷 彼の東南の夷を討つ

傅玄「晋鼓吹曲二十二篇・古擁離行」（『宋書』樂志二）  
蠢爾吳蛮 蠢爾たる吳蛮  
虎視江湖 江湖に虎視す  
我皇赫斯 我皇 赫たり  
致天誅 天誅を致す

傅玄<sup>12</sup>「晋鞞舞歌五篇・景皇篇」（『宋書』樂志四）  
羽檄首尾至 羽檄 首尾至り  
變起東南蕃 變 東南の蕃に起る  
俟欽為長蛇 俟欽 長蛇と為り  
外則憑吳蛮 外は則ち吳蛮に憑る

※俟欽：卬丘俟・文欽。司馬氏に対して反乱を起こす。

これらの詩では呉を指して「東南夷」「吳蛮」と呼ぶ。異民族ではないが、魏や晋の朝廷の徳に服さない外敵で

あり、さらに魏晉に比べ制度・文化的に劣っているという侮蔑的意味を含み、「夷」「蛮」を付していると考えられる。慰撫されるのではなく、討つべき敵としての「夷」「蛮」である点も漢代の詩の描かれ方とは異なっている。なお呉が南方にあることから「呉蛮」と言うのであろうが、呉を指して「夷」と言うのは王粲の詩の「東南夷」しか見られない。東と「夷」との結びつきからこの語を用いたのかも知れないが、「夷」に方角性が見られるのは六朝詩を通してこの一例のみである。

## (2) 戎・狄

漢代の詩にはあまり見られなかった「戎」「狄」のうち、「狄」は依然としてほとんどないが、三国以降には特に「戎」が多く用いられるようになる。とりわけ「西戎」の語はこの時代特有の使われ方が見受けられる。

曹操「飲馬長城窟行」

《文選》卷二三 歐陽建「臨終詩」注

四時隱南山

四時 南山に隠れ

子欲適西戎

子 西戎に適かんと欲す

曹丕「折楊柳行」《宋書》樂志三

彭祖称七百

彭祖 七百と称するも

悠悠安可原

悠悠として安んぞ原ぬ可けんや

老聃適西戎

老聃 西戎に適き

戎」がその大半を占める。

歐陽建「臨終詩」李善注に引く『列仙伝』によると、老子は「西遊」し、「流沙之西」に行つたというが「戎」の語はない。「西戎」の語は李善注では曹操の「飲馬長城窟行」に基づくとするが、この詩は二句しか現存しておらず、この「子」を老子とすべき根拠はない。『史記』老子列伝の集解に引く『列仙伝』も李善注と同じく「与老子俱之流沙之西」に作るが、現行の『古今逸史』本『列仙伝』には「与老子俱游流沙、化胡」（老子と俱に流沙に遊び、胡に化す）とあり、「之西」はなく「化胡」の二字がある。そしてこの「化胡」の語は「老子化胡説」を連想させる。

「老子化胡説」とは、老子が西域印度へと赴き、胡人を教化し、釈迦に教えを授けた、あるいは老子が釈迦になつたとする説である。これに関する最も古い記述は、後漢・襄楷の上書（『後漢書』本伝）にある「或言、老子入夷狄為浮屠」（或いは言ふ、老子夷狄に入り浮屠と為る）という文であり、さらに『三国志』魏書・東夷伝に引く魚豢『魏略』西戎伝には「浮屠所載与中国老子經相出入、蓋以為老子西出關、過西域之天竺、教胡」（浮屠の載する所と中国の老子經と相ひ出入するは、蓋し以為らく老子西のかた関を出で、西域を過ぎ天竺に之き、胡に教ふればなり）とある。ここからこの説は後漢から三国時代にかけて広く知られていたと考えられる。『列仙伝』は前漢の劉向の撰と伝えられているが、後世の偽作説も

于今竟不還

今に于て竟に還らず

阮籍「詠懷八十二首・其四十二」《古詩紀》卷一九

天時有否泰

天時に否泰有り

人事多盈冲

人事に盈冲多し

園綺遯南岳

園綺 南岳に遯れ

伯陽隱西戎

伯陽 西戎に隠る

歐陽建「臨終詩」《文選》卷二三

伯陽適西戎

伯陽 西戎に適き

子欲居九夷

子は九夷に居らんと欲す

《李善注》列仙伝曰、老子西遊、尹喜見之、与老子俱之

流沙之西。魏武飲馬長城窟行曰、四時隱南山、子欲適

西戎。論語曰、子欲居九夷。

石崇「答曹嘉詩」《三国志》魏書・楚王彪伝注

孔不陋九夷

孔は九夷を陋とせず

老氏適西戎

老氏は西戎に適く

逍遙滄海隅

滄海の隅に逍遙として

可以保王躬

以て王躬を保つ可し

これらの「西戎」はいずれも西方の異民族ではなく、老子が赴いた地という意で用いられる。人が赴く地として「蛮」「夷」は漢代から見られたが、「戎」をその意味で用いるのは三国・西晋期にのみ確認でき、かつこの「西

根強く、いずれにせよ現行の『列仙伝』《古今逸史》等）にある「化胡」の二字は、この「老子化胡説」の影響を受けて付されたと思われるであろう。

ところでこの「老子化胡説」は、後漢以来盛んになる仏教に対して道教の優位性を主張するものとされ、ひいては西晋・王浮の『老子化胡経』の成立へと至る。しかし先に挙げた詩には、いずれも仏教との関連性は見られず、あくまで老子が最後に赴いた地、隠遁した地として詠まれるのみである。

三国から西晋にかけて老莊思想が広がっていく中で、隠遁を詩に詠う際に、老子が「西戎」へと赴いたという伝承は詩に詠み込みやすかつたのだろうか。しかし一方でこの時代より後の詩には、老子が赴いた地としての「西戎」は見られなくなる。

「西戎」はまた「九蛮」「九夷」の語と合わせて用いる例もある。これは歐陽建「臨終詩」の李善注に引くように『論語』に基づく。子罕に「子欲居九夷。或曰、陋如之何。子曰、君子居之、何陋之有」（子九夷に居らんと欲す。或ひと曰く、陋しきこと之を如何せんと。子曰く、君子之に居らば、何の陋しきことか之れ有らんと）とあり、「九夷」（九蛮）は異民族ではなく孔子が行こうとした辺地の意で用いられる<sup>10</sup>。

この他、「西戎」の例としては以下の詩がある。

周処「詩」《晋書》本伝

去去世事已 去き去きて世事已み  
策馬觀西戎 馬に策ちて西戎を觀る  
藜藿甘梁黍 藜藿 梁黍を甘しとす  
期之克令終 之を期して克く終へしめん

潘尼「贈隴西太守張仲治詩」(『芸文類聚』卷三二)  
未幾振朱錦 未だ幾ならずして朱錦を振ひ  
剖符撫西戎 符を剖きて西戎を撫す

周処は、晋の元康元年(二九六)に起こった氐羌族の  
斉万年の反乱に際して、その討伐に奮戦するも、味方に  
陥れられたために力尽き戦死してしまうという人物であ  
る。死を覚悟したその戦いの前に詠ったとされるのがこ  
の詩であり、すなわち「西戎」とは実際に彼が赴いて戦  
っていた異民族である氐羌を指す。

また潘尼の詩は、隴西太守となった張仲治に対して、  
任地にて異民族を慰撫する功績を挙げるであろうと詠っ  
ている。よって「西戎」は隴西にいる異民族を指す。

すなわちこの二首の「西戎」は、周処や張仲治が実際  
に戦ったり慰撫したりした、西方にいる具体的な異民族  
を念頭に置いた語である。

そしてこの「西戎」以外にも、特に西晋の詩には「戎」  
がしばしば見受けられる。

摯虞「雍州詩」(『初学記』卷八)

一挙覆三軍 一たび挙げて三軍を覆し  
再举殄戎貊 再び挙げて戎貊を殄す

嵇康「贈秀才入軍十九首・其十八」(『古詩紀』卷一九)  
生若浮寄 生は浮寄するが若く  
暫見忽終 暫に忽ち終るを見る  
世故紛紜 世は故に紛紜たり  
棄之八戎 棄てて八戎に之かん

摯虞の「雍州詩」ではその州内に「華」や「戎」がい  
ると言うが、雍州という地からこの「戎」には西方の異  
民族の意を含むものと思われる。「華」と「戎」とを対比  
的に用いるのは、すでに後漢・張衡「西京賦」(『文選』  
卷二)に「右有隴坻之隘、隔閼華戎」(右に隴坻の隘有り、  
華戎を隔閼す)と見えるが、長安の西にある「隴坻」山  
が「華戎」を隔てると述べていることから、この「戎」  
も西方の異民族を念頭に置いた語である。おそらく摯虞  
の詩も同様であろう。

一方、張華の「晋四箱樂歌」の「華戎」も「華」と「戎」  
を対比的に用いるが、朝廷の徳化が広汎に及ぶことを詠  
っており、この「戎」に方角への意識はない。張衡や摯  
虞の作に見る「戎」とは異なり、不特定の異民族を指す  
汎称であろう。同じく張華の「壯士篇」では、壯士の武  
威が及ぶ対象としての異民族あるいは辺地を「四戎」と  
言うが、そこにやはり方角性はない。

悠悠州城 悠悠たる州城  
有華有戎 華有り戎有り  
外接皮服 外に皮服に接し  
内含岐豊 内に岐豊を含む

張華「晋四箱樂歌十六篇・食举東西箱樂詩十一章・其  
十一」(『宋書』樂志二)  
王沢洽 道登隆 王沢洽く 道登隆んなり  
綏函夏 綏華戎 函夏を綏んじ 華戎を綏ぶ

張華「壯士篇」(『樂府詩集』卷六七)  
震響駭八荒 震響 八荒に駭き  
奮威曜四戎 奮威 四戎に曜く

傅玄「答程曉詩」(『芸文類聚』卷三二)  
顯顯兆民 顯顯たる兆民  
蠢蠢戎羶 蠢蠢たる戎羶  
率土充庭 率土 庭を充ひ  
万国奉蕃 万国 蕃を奉ず  
皇沢雲行 皇沢 雲のごとく行き  
神化風宣 神化 風のごとく宣ぶ

傅玄「詩」(『芸文類聚』卷六〇)  
彎我繁弱弓 我が繁弱の弓を彎き  
弄我丈八稍 我が丈八の稍を弄す

傅玄の「答程曉詩」には「戎羶」というが、「羶」は羊  
の生肉、ひいてはなまぐさいの意であり、それを「戎」  
に付すことで異民族に対する侮蔑的な意味を込めるので  
あろう。この「戎羶」も方角が意識されているように  
見受けられず、朝廷の徳化に従う異民族の汎称として用  
いられている。また同じく傅玄の「詩」には「戎貊」の  
語が見える。「貊」とは北方異民族の名であり、「戎貊」  
で北方と西方の異民族を指すとも解釈できる。しかしこ  
の傅玄の「詩」は『芸文類聚』卷六〇「軍器部・稍」に  
この四句しか残っておらず、全体像が不明なため、「戎貊」  
が汎称であるのか個別の異民族を指すのかは定かではな  
い。ただいづれにせよ、この「戎貊」は「弓」や「稍」  
によって征伐される異民族である。

嵇康の詩の「八戎」は、人が赴く地としての「戎」で  
あり、その意味では「西戎」と同様であるが、方角への  
意識はなく遠く離れた辺地をいう。そしてこれ以降、六  
朝詩に誰かが赴く地としての「戎」は見られない。

こうして見てくると、「西戎」の語では西方の辺地や西  
方の異民族を表し、それ以外の「戎」は一部西方の意を  
含むものもあるが、全体としては主に西晋の詩に異民族  
の汎称として用いる例が増えてくるのが分かる。それら  
の「戎」は、朝廷の徳化が及ぶ異民族をいう場合もあれ  
ば、征伐の対象となることもある。

このように多用される「戎」に対し、異民族「狄」が  
六朝詩に用いられる例は、次の詩と後述する張駿の詩の

みである<sup>[15]</sup>。

潘岳「関中詩」(『文選』卷二〇)

蠡爾戎狄

蠡爾たる戎狄

狡焉思肆

狡焉として肆にせんことを思ふ

〔李善注〕毛詩曰、蠡爾蛮荆。傳暢諸公讚曰、北地盧水胡馬蘭羌因此為乱、推齊万年為主。

：(略)：

俾我晋民

我が晋の民をして

化為狄俘

化して狄の俘為らしむ

この潘岳の詩は、全体としては先にも述べた氐羌族の齊万年の反乱が平定されたこと喜ぶ詩であるが、引用した部分は乱が起こったこと、民が禍を被る様子が詠われる。「戎狄」「狄俘」と言い、異民族としての「狄」が六朝詩に初めて確認できる。「戎狄」の李善注に引く傳暢の「諸公讚」に「北地盧水の胡」、「馬蘭の羌」が乱を起こしたというが、「盧水」とは河北省盧龍県の北を流れる川であり、「馬蘭」は陝西省白水県の西にある山の名である。よつて北と西という方角を意識しつつ、乱を起こした異民族(氐羌)を「戎狄」と呼んだのではないだろうか。そしてこれは征伐すべき寇敵としての異民族である。

先に述べたように、この他には六朝詩において「狄」が用いられる例はほとんどない。しかし一方で『文選』を検すると、「狄俘」の例はないが、「戎狄」については

この「関中詩」を含め七例(卷三張衡「東京賦」、卷三五潘勖「冊魏公九錫文」、卷三九枚乘「上書重諫吳王」、卷四一李陵「答蘇武書」、卷四九干宝「晋紀総論」、卷五四劉峻「弁命論」)確認できる。つまり文ではしばしば見られるが、詩にはあまり用いられない語であると言える。その理由については定かではないが、一つには「蛮」「夷」「戎」が全て平声であるのに対し、「狄」が入声であることは考慮すべき点かも知れない。

### (3) 虜

この時代の特徴として、「蛮夷戎狄」以外に異民族を表す語として「虜」が多用される点が挙げられる。

王粲「從軍詩五首・其一」(『文選』卷二七)

相公征関右

相公 関右を征し

赫怒震天威

赫怒 天威を震ふ

一挙滅獯虜

一たび挙げて獯虜を滅ぼし

再举服羌夷

再たび挙げて羌夷を服せしむ

西收辺地賊

西のかた辺地の賊を収むるは

忽若俯拾遺

忽として俯して遺を拾ふが若し

〔李善注〕漢書曰、獯鬻虐老獸心。服虔曰、獯鬻、堯時匈奴号也。

この王粲の詩では、曹操によつて「獯虜」「羌夷」「辺地賊」が征伐されたことを詠う。「獯虜」は李善注によれ

ば、『漢書』にある「獯鬻」という堯の時の匈奴の呼び名に基づくとする。「獯鬻」(匈奴)は北方の異民族である

ことから、建安十二年(二〇七)に曹操が征伐した烏丸族を指すものと思われる。この場合あくまで「獯」が北方の意を含むのであつて、「虜」に方角性はない。また「羌夷」について李善注は付されていないが、「羌」が西方異民族の名であることから、建安十六年(二一一)に馬超ら関中軍閥を征したことをいうのであろう。これも方角性があるのは「羌」であつて「夷」ではない。なお馬超は羌族の血を引くとされる。すなわちこれら「獯虜」「羌夷」は、実際に曹操が征した異民族であり、そしてその後続く「辺地賊」が、建安二十年(二一五)に征した漢中の張魯を指すと考えられる。

また「虜」を蜀や呉を指すのに用いる例も散見される。

曹丕「飲馬長城窟行」(『芸文類聚』卷四二)

浮舟横大江

舟を浮べて大江に横はり

討彼犯荆虜

彼の荆を犯す虜を討つ

曹叡「權歌行」(『宋書』樂志三)

蠡爾吳蜀虜

蠡爾たる吳蜀の虜

憑江棲山阻

江に憑き山阻に棲む

傅玄「晋鼓吹曲二十二篇・古朱鷺行」(『宋書』樂志二)

吳寇勁 蜀虜彊

吳寇勁く 蜀虜彊し

交誓盟 連遐荒 誓盟を交し 遐荒に連なる

そもそも「虜」とは、「とりこ」「とりこにする」という意であるが、漢代頃から文においては敵や異民族を指す語として用いられている。とりわけ『史記』李將軍列伝や、李陵「与蘇武書」(『文選』卷四一)などにしばしば見られるが、それらはすべて敵である匈奴を指している<sup>[16]</sup>。しかし詩に見られるのは、確認できる限りにおいては三国時代以降であり、魏や西晋の人が呉や蜀を呼ぶ際にもよく用いられる。これらの例は実際の異民族を指して言っているのではないが、先に挙げた「東南夷」「呉蛮」等と同様、魏や西晋の人にとって辺地にある敵国の蜀や呉を、侮蔑の意味を込めてこのように呼んだのである。

ところで上記は征伐すべき現実の敵を指して「虜」と言うが、以下のような例もある。

曹植「白馬篇」(『文選』卷二七)

辺城多警急

辺城 警急多く

胡虜数遷移

胡虜 数しば遷移す

羽檄従北来

羽檄 北従り来り

厲馬登高堤

馬を厲<sup>はげ</sup>まして高堤に登る

長驅踏匈奴

長驅して匈奴を踏み

左顧凌鮮卑

左顧して鮮卑を凌ぐ

〔李善注〕漢書曰、匈奴、其先夏后氏之苗裔也。又曰、

燕北有東胡山戎、或云鮮卑。

陸機「飲馬長城窟行」(『文選』卷一八)

驅馬陟陰山 馬を駆りて陰山に陟らんとするも

山高馬不前 山高くして馬前まず

往問陰山候 往きて陰山の候に問へば

勁虜在燕然 勁虜燕然に在りと

：〈略〉：

獫狁亮未夷 獫狁亮に未だ夷<sup>たひら</sup>らざる

征人豈徒旋 征人豈に徒らに旋らんや

〔李善注〕獫狁、匈奴也。毛詩曰、赫赫南仲、獫狁于夷。

毛萇曰、夷、平也。

これらの詩では辺境にある異民族を征伐せんとする気概を詠う。曹植の詩では「胡虜」と言い、異民族の汎称を重ねた語を用い、陸機の詩では「虜」に「勁」字を冠し、敵である異民族が強力であることを言うが、いずれも六朝詩には他に用例が無い語である。その他、「匈奴」「鮮卑」「獫狁」といった具体的な異民族名も挙げられるが、やはりすべて征伐の対象である。これらの作はいずれも楽府であり、現実が起こっている出来事に重ね合わせているのかも知れないが、描かれるのは仮構の世界であり、それは漢代をイメージさせる。この点同じ楽府でも先の曹丕、曹叡らの作が、現実の敵である呉や蜀を描いているのとは大きく異なる。そしてこのように仮構の

騎。单于奔走。其後十余歳、匈奴不敢近趙辺城。

孫綽「与庾冰詩十三章・其二」(『文館詞林』卷二五七)

蛮夷交迹 蛮夷は迹を交へ

封豕充衢 封豕は衢に充つ

まず張駿の詩では、「獫狁」の侵略によって都が奪われたこと、「衆狄」を討ち果たそうという誓いを立てることが詠われる。「獫狁」とは、陸機「飲馬長城窟行」の「獫狁」と同じで匈奴を意味する。これは楽府ではあるが、実際に起こった事象を描いているのは間違いなく、ここにいる「衆狄」は、西晋を滅ぼした匈奴をはじめ、華北を蹂躪していた五胡を指す。先に述べたように六朝詩に「狄」が用いられるのは、確認できる限りではこの詩と先の潘岳「関中詩」のみであるが、いずれも具体的な異民族を念頭に置いたものである。

次の盧湛の詩であるが、彼はこの時、鮮卑族でありながら西晋の撫軍大將軍・幽州刺史であった段匹磾のもとにあり、その恩顧に報いようとする思いがこの詩にはつづられてる。その中で北地にあってかつて戦国時代に匈奴を破った李牧に思いを馳せるのだが、同時に現在の状況(今の主の段匹磾、あるいはかつて仕えた劉琨が幽州・并州を守っていること)と重ね合わせているのかも知れない。そうであるならばこの「荒夷」はかつての李牧が征伐した匈奴に、今まさに華北を蹂躪している五胡を重

世界で異民族を征伐することを詠うのは、宋代以降により盛んになっていく。

また、これらの「虜」が「蛮夷戎狄」と異なるのは、一つには方角性がないこと、さらには慰撫され懐き従う存在として描かれることがなく、すべて戦い征伐すべき寇敵であるという点である。

### 三 東晋の詩

さて五胡の侵入によって西晋が滅び、東晋が成立すると、華北の士大夫も続々と江南へと移ってくる。そのような東晋の詩に「蛮夷戎狄」が描かれるのは以下の三首である。なおこの時代に異民族の「虜」は見られない。

張駿「薤露行」(『樂府詩集』卷二七)

三方風塵起 三方より風塵起り

獫狁竊上京 獫狁上京を竊む

：〈略〉：

誓心蕩衆狄 心に誓ふは衆狄を蕩かし

積誠徹昊靈 積誠昊靈に徹せしめんことを

盧湛「贈崔溫」(『文選』卷二五)

李牧鎮辺城 李牧 辺城を鎮め

荒夷懷南懼 荒夷 南懼を懷く

〔李善注〕史記曰、李牧者、趙之北辺良將也。：〈略〉

：李牧多為奇陣、張左右翼擊之、大破、殺匈奴十余万

ね合わせていると言えよう。

孫綽の詩は、西晋が異民族の侵略によって滅びたことと東晋が興ったことを述べ、天子の徳を賛するとともにそれを支える庾冰を称える内容となっており、ここに言う「蛮夷」とは、実際に西晋を侵略した異民族である五胡を指すと考えられる。

すなわちこれらの詩に見る「衆狄」「荒夷」「蛮夷」は不特定の異民族を表すのではなく、いずれも西晋を滅ぼした匈奴などの五胡を念頭に置いたものであるが、それらの語に方角への意識はない。

東晋の詩そのものが残っている数は少ないというものもあるが、それでも東晋時代に異民族を詩に詠うことが稀であるのは間違いない。それまでの異民族は、征伐されたり服従したりする存在であり、漢や魏、西晋の朝廷が異民族に対して優位であるという前提のもと詠われている。その前提が崩れた東晋においては、侵略され都を奪われたという記憶が生々しいということもあり、結果的に詩に詠うことが少なくなったのではないだろうか。

### 四 南朝の詩

続いて宋以降であるが、まず特徴の一つとして異民族としての「蛮」が南朝を通して見られなくなる点が挙げられる。これはやはり自分たちが今居る地が、かつて「呉蛮」「荆蛮」と呼ばれていたという認識があるためである

う。「狄」もやはり見られず、南朝の詩に用いられるのは、「夷」「戎」および「虜」である。

そこでこれらの語が用いられる詩を見てみると、まず従来のように天子の徳や王の教化に服する異民族が詠われることもあるが、先の漢や魏、西晋に比べると決して多いとは言えない。確認できたのは以下の四首であり、用いられるのは「夷」「戎」のみで、やはり「虜」の例は見られない。

齊・太廟樂歌辭・高德宣烈樂」《南齊書》樂志

戎夷竭歛 戎夷 歛を竭くし  
象来致福 象 来りて福を致す

梁・武帝蕭衍「宴詩」《芸文類聚》卷五九

四主漸懷音 四主 漸く音を懷ひ  
九夷稍革面 九夷 稍く面を革む

梁・昭明太子蕭統「春日宴晋熙王詩」《芸文類聚》卷二九

藩哲遊沮夢 藩哲 沮夢に遊び  
揚化撫辺戎 化を揚げて辺戎を撫す

梁・簡文帝蕭綱「上之回」《樂府詩集》卷一六

笳声駭胡騎 笳声 胡騎を駭かしめ  
清磬響山戎 清磬 山戎を響れしむ

宋・鮑照「擬古詩三首・其三」《文選》卷三一

晚節從世務 晚節には世務に従ひ  
乘障遠和戎 障に乗りて遠く戎と和す

《李善注》左氏伝、晋侯謂魏絳曰、子教寡人和諸戎狄。

宋・鮑照「東武吟」《文選》卷二八

後逐李輕車 後には李輕車を逐ひ  
追虜窮塞垣 虜を追ひて塞垣を窮む

《李善注》范曄後漢書曰、耿夔追虜出塞而還。

宋・鮑照「出自薊北門行」《文選》卷二八

嚴秋筋竿勁 嚴秋 筋竿勁く  
虜陣精且強 虜陣 精れて且つ強し

宋・鮑照「白馬篇」《樂府詩集》卷六三

要途問辺急 途を要めて辺の急なるを問ひ  
雜虜入雲中 虜に雜りて雲中に入る

：《略》：

丈夫設計誤 丈夫 設計誤り  
懷恨逐辺戎 恨を懷きて辺戎を逐ふ

齊・虞羲「詠霍將軍北伐」《文選》卷二二

涼秋八九月 涼秋八九月  
虜騎入幽并 虜騎 幽并に入る

なお簡文帝の「上之回」は、天子が回中（陝西省隴県）

に行幸し、それを「胡騎」「山戎」が恐れる様子が描かれており、必ずしも天子の徳に従うものではないかもしれないが、ひとまず服従する異民族と見なしておく。

かつて漢、魏、西晋において盛んに朝廷の徳化が詠われていた雅樂は一首のみしか見られない。やはり異民族によって南に追いやられているという状況にあつては、朝廷の徳を称える場合であっても、威徳や教化が異民族にも及ぶという詩は作りにくかったのかもしれない。

そこでこの時代の詩として特徴的なのは、以下の例である。なお先には「戎」と「虜」とを分けて考察したが、「西戎」の語以外で「戎」に方角が意識されることはほとんどなく、異民族の汎称という点では「虜」と同様であることから、ここでは合わせて扱うこととする。

宋・袁淑「効古」《文選》卷三一

昔隸李將軍 昔 李將軍に隸ひ  
十載事西戎 十載 西戎を事とす  
《李善注》西戎、匈奴也。毛詩序曰、備其兵甲、以討西戎也。

宋・鮑照「擬古詩三首・其一」《文選》卷三一

漢虜方未和 漢虜 方に未だ和せず  
辺城屢翻覆 辺城 屢しば翻覆す

齊・孔稚珪「白馬篇」《樂府詩集》卷六三

虜騎四山合 虜騎 四山に合し  
胡塵千里驚 胡塵 千里驚く

梁・吳均「胡無人行」《樂府詩集》卷四〇

鉄騎追驍虜 鉄騎 驍虜を追ひ  
金羈討黠羌 金羈 黠羌を討つ

梁・吳均「渡易水」《樂府詩集》卷五八

雜虜客來齊 虜に雜りて客して齊に來り  
時余在角抵 時に余 角抵に在り

梁・吳均「古意詩二首・其一」《古詩紀》卷八二

雜虜寇銅鋌 雜虜 銅鋌に寇し  
征役去三齊 征役 三齊に去く

梁・簡文帝蕭綱「度関山」《樂府詩集》卷二七

舉旗遠不息 旗を舉ぐることを遠くして息まず  
驅虜何窮極 虜を驅ること何ぞ窮極ならんや

梁・劉孝威「妾薄命行」《芸文類聚》卷四一

勿言戎夏隔 戎夏の隔つるを言ふ勿かれ  
但令心契冥 但だ心契をして冥せしめん



陳・江総「雜曲三首・其一」(『樂府詩集』卷七七)  
紅顏素月俱三五 紅顏素月俱に三五  
夫婿何在今追虜 夫婿何くにか在りて今 虜を追ふ

陳・李燮「紫騮馬」(『樂府詩集』卷二四)  
三辺追黠虜 三辺 黠虜を追ふ  
一鼓定彊胡 一鼓 彊胡を定む

これらはいずれも擬古詩や詠史詩、そして樂府である。最初に挙げた袁淑の詩の「西戎」は、三国・西晋期によく見られた老子の赴いた地ではなく、漢の李広が戦った敵としての「西戎」(匈奴)であるが、これを除いて方角が意識されるものはなく、これらの「戎」「虜」はいずれも異民族の汎称である。また鮑照に特に目立つが、孔稚珪、吳均の詩なども同様で遊俠をテーマとする作品において、戦うべき敵としての異民族が多く詠われる。徳化に服する異民族が「夷」「戎」であるのに対し、戦う敵である異民族はやはり「虜」で表されることが多い。また「胡」が「虜」との対で用いられる例も見られるが、「胡塵」「彊胡」の「胡」はいずれも異民族の汎称である。最初に述べたように六朝詩に見る「胡」の意味は非常に多岐にわたるが、このように「虜」と対で用いられる場合、あるいは先に挙げた曹植の詩の「胡虜」のように合わせて用いる場合は、「虜」と意味において差は無いものと思われる。

やはり現実の異民族を描くものではなく、方角に対する意識もない。ことは遊び的に異民族を表す語を用いたり、先の樂府などと同じくイメージとしての異民族を詠ったりしているだけである。

他方で、具体的な異民族を念頭に置いて詠われる詩としては以下の作がある。

宋・文帝劉義隆「元嘉七年以滑台戰守彌時遂至陷没乃作詩」(『宋書』索虜伝)

逆虜乱疆場 逆虜 疆場を乱し  
辺將嬰寇仇 辺將 寇仇に嬰る

齊・謝朓「和王著作八公山」(『文選』卷三〇)  
戎州昔乱華 戎州 昔 華を乱し

素景淪伊穀 素景 伊穀に淪む  
阨危頼宗袞 危に陥みて宗袞に頼り  
微管寄明牧 管微かりせば明牧に寄る  
(李善注) 乱華、謂符堅也。左氏伝曰、衛侯登城以望見戎州、公曰、我姬姓也。何戎之有焉。又孔子曰、裔不謀夏、夷不乱華。素景、謂晋也。

梁・王筠「侍宴餞臨川王北伐啓詔詩」(『芸文類聚』卷二九)

金正圯徳 金正 徳を圯ち  
水行失道 水行 道を失ふ

そしてこれら擬古詩や詠史詩、樂府では、かつて曹植や陸機の作に見られたように(実際に起こっている事象や自分の立場をそこに重ね合わせているのかもしれないが)、古の仮構した世界において、イメージとしての異民族と戦う様子を描いている。それは現実にいる具体的な異民族を詠うものではない。

またこの他、次のような詩も南朝の特に後期に特有のものである。

梁・范雲「奉和齊竟陵王郡県名詩」(『芸文類聚』卷五六)  
臨涇方弁渭 涇に臨みて方に渭を弁じ  
安夷始和戎 夷を安んじて始めて戎を和す

梁・元帝蕭繹「將軍名詩」(『芸文類聚』卷五六)  
鳴鞭俱破虜 鞭を鳴らし俱に虜を破り  
決勝往長榆 勝を決して長榆に往く

陳・賀徹「賦得長笛吐清氣詩」(『初學記』卷一六)  
方知出塞虜 方に知る 塞を出づるの虜の  
不憚武溪深 武溪の深さを憚れざるを

范雲、元帝の作は、詩に県名や將軍名を詠み込む<sup>18)</sup>ものであり、賀徹の作は先行する詩句「長笛吐清氣」は曹丕「善哉行」の句を割り当てられてそれを元に詩作を行うという、いずれも遊戯性の強い詩である。これらも

胡馬南牧 胡馬 南に牧し  
戎徒西保 戎徒 西に保つ  
苻食伊瀍 伊瀍を苻食し  
整居豊鎬 豊鎬に整居す

梁・庾肩吾「乱後行經吳郵亭詩」(『芸文類聚』卷三四)  
獯戎鯁伊洛 獯戎 伊洛に 鯁し  
雜種乱輶轅 雜種 輶轅を乱す

陳・沈炯「長安還至方山愴然自傷詩」(『芸文類聚』卷三四)  
猶疑屯虜騎 猶ほ虜騎屯するかと疑ひ  
尚畏值胡兵 尚ほ胡兵に値ふを畏る

まず宋文帝の詩は、元嘉七年(四三〇)十一月、宋の北伐によって一時的に回復していた河南の滑台が再び北魏の手に落ちた際に詠ったものである。よって「逆虜」とは北魏を指す。

謝朓の詩は昔のことではあるが、擬古詩などとはやや異なり、「戎州」(前秦)によって東晋が一時回復した洛陽が奪われたこと、その後符堅が南下して東晋が危機に陥った際に祖先の謝安が頼りにされたことなどの具体的な事象が詠われている。詠史的な一面もあるが、漢代の匈奴との戦いを詠うような詩とは異なり、作者謝朓にとっては比較的近く、かつ自分にもつながる過去の出来事

を詠ったものと言える。この「戎州」は五胡十六国の一つ前秦を指す。

王筠の詩は、天監四年（五〇五）、臨川王蕭宏が北伐に向かう際に、それを見送る宴の席で詠まれたものである。晋（金徳）の徳が壊れ、宋（水徳）の道が失われたために「胡馬」が南の地で牧され、「戎徒」が（建康から見て）西の地を蹂躪し、洛陽・長安が占拠されていると言う。すなわち「戎徒」とは北魏の兵を指すが、「西保」というように方角に対する意識も見られる。またその対となる「胡馬」もやはり北魏を意味するが、それが「南に牧す」というのは「胡」に北の意を含むためであらう。すなわちこの「胡」は、異民族と北方の地の両意を含む語である。

庾肩吾の詩は、作者が侯景の乱後に呉の郵亭（未詳）を通った時の作である。「伊洛」は洛陽の意であるが、ここでは梁の都建康を指すと思われ、そうであるならば「獯戎」とは侯景および彼の率いた兵を指す。侯景の出自は定かではないが、梁人は北朝から渡って来た異民族と見なしていたことは間違いない<sup>[19]</sup>。

沈炯の詩は、作者が西魏の都長安から方山（建康の東南にある山）に帰ってきた時の作である。沈炯は梁の承聖三年（五五四）、西魏の江陵侵攻時に捕らわれ、およそ二年に渡って長安に抑留されており、そのため南に帰ってきててもまだ北で見たような「虜騎」「胡兵」が居るのではないかと恐れているのである。いずれも西魏の兵を指

しており、ここでも「虜」と「胡」を対に用いるが、これらが同義であるという点は、先の楽府に見られた例と同様である。

これらの詩において「戎」と言い「虜」と言うが、意味において差は見られず、いずれも敵対する異民族の国やその兵である。そして王筠の詩を除き、方角に対する意識はない。

このように現実の具体的な異民族を念頭に置いて詠う詩もあるが、その数は少なくやはり例外的と言えよう。しかもその場合は戦に敗れたことや、都を蹂躪されたこと、異民族に対する恐れといったマイナスの要素を描くことが多い。楽府などの仮構の世界において、遊侠の徒が異民族と勇ましく戦う姿とは極めて対照的である。

## 五 北朝の詩

最後に北朝の詩に見られる「蛮夷戎狄」および「虜」について見てみたい。

北魏・高允「答宗欽詩・其二」（『魏書』本伝）  
望傾羣雄 望は羣雄を傾け  
響振華戎 響は華戎に振ふ

北魏・節閔帝元恭「聯句詩」（『北史』薛孝通伝）  
君臣体魚水 君臣は魚水を体し  
書軌一華戎 書軌は華戎を一にす

北周・王褒「燕歌行」（『樂府詩集』卷三二）  
充国行軍屢築營 充国 行軍し屢しば營を築き  
陽史討虜陷平城 陽史 虜を討ち平城を陥す

まず帝の御製や雅楽が多く、そして「華戎」（戎華）の語が目立つ。当然のことながら自分たちを「戎」と捉えているのではないだろうし、かといって自分たちを「華」、南朝を「戎」と見なしていたとも考えにくい。「華戎」の語は張華「晋四箱楽歌」に「総華戎」とあったのみで、それ以降の南朝の詩には見られない。もとは自分たちを「華」とし、自分たちの国の外にあり異なる制度・文化の人々を「戎」と捉えていたと思われるが、しだいに単に国の内外の意、ひいては広く天下を表す語と解されるようになったのではないだろうか。それは「元会大饗歌・皇夏」の「戎華」の対に「内外」とあることからもうかがえる<sup>[20]</sup>。

また南朝では見られなかった「蛮」（百蛮）が「元会大饗歌・登歌」に一例のみであるが確認できる。ただし南方の意を含むのではなく異民族の汎称と見て良いだろう。さらに「虜」を用いた詩もあるが、いずれも楽府であり、古を舞台とした仮構の世界における異民族である点は南朝の詩と共通している。

## おわりに

北齊「元会大饗歌・皇夏」（『隋書』音楽志中）  
我応天曆 我 天曆に応じ  
四海為家 四海を家と為す  
協同内外 内外を協同し  
混一戎華 戎華を混一す

北齊「文舞辞」（『隋書』音楽志中）  
神化之洽 神化の洽きこと  
率土無外 率土 外無し  
眇眇舟車 眇眇たる舟車  
華戎畢会 華戎 畢く会す

北周・庾信「周五声調曲・宮調曲五首・其二」（『樂府詩集』卷一五）  
玉帛咸觀礼 玉帛 咸な礼を觀  
華戎各在庭 華戎 各おの庭に在り

北齊「元会大饗歌・登歌三曲・其一」（『隋書』音楽志中）  
百蛮非衆 百蛮は衆きに非ず  
八荒非逖 八荒は逖きに非ず

北魏・祖叔弁「千里思」（『樂府詩集』卷六九）  
細君辞漢宇 細君 漢宇を辞し  
王嬙即虜衢 王嬙 虜衢に即く

以上、六朝詩に見られる異民族の描かれ方について「夷戎狄」および「虜」の語を中心に考察してきた。

「蛮夷戎狄」のうち、まず「蛮」は漢代には異民族の汎称として用いられることが多かったが、三国時代以降は南という方が意識されることも増えてくる。例えば「荆蛮」「呉蛮」などの語を見ても、荊州や呉を「蛮」と見なす風潮があったことが分かる。しかしそれが南朝になると、自分たちがいる場所を指すことになり、結果として宋以降の詩に「蛮」は使われなくなる。「夷」は、漢代から六朝を通して方が意識されることはほとんどなく、総じて異民族の汎称として用いられている。「戎」は、漢代では西方異民族を指し、六朝においても「西戎」の語では方が意識されるが、それ以外では異民族の汎称であることが多い。なお『礼記』にいう「東夷」「南蛮」「西戎」「北狄」のうち、六朝詩に見られたのはこの「西戎」のみである。「狄」は六朝詩には二例しか確認できないが、いずれも具体的な異民族を念頭に置いたものである。

このように六朝詩に見られる「蛮夷戎狄」の語は一樣ではなく、それぞれ用いられ方に特徴が異なっている。一方の「虜」は、三国時代以降に用いられるようになり、そのほとんどが征伐の対象となる異民族である。

時代ごとの特徴をもう少し詳しく見てみると、まず漢代では「蛮」「夷」の語を用い、慰撫され服することによって朝廷の威徳を称える存在としての異民族がよく描かれている。

たが、三国・西晋時代になると、懐き従う異民族も引き続き描かれる一方、征伐の対象として詠われることも多くなる。その際に「虜」を用いることが増え、魏人や晋人が呉や蜀を言う際に侮蔑的な意味を含め、「呉蛮」「蜀虜」などと呼ぶ例も目立つ。また漢代にはあまり見られなかった「戎」が三国時代以降に盛んに用いられるようになり、とりわけ老子の赴いた地としての「西戎」が三国・西晋期に集中的に見られるのは特徴的である。

しかし東晋では異民族を詩に詠うことが少なくなり、すでに述べてきたように宋以降の南朝では、擬古詩や楽府などの仮構の世界の中で、現実ではない異民族が盛んに詠われるようになる。そこには朝廷の徳に服するものも描かれるが、それよりもむしろ戦うべき寇敵としての異民族を詠う場合が多い。

そもそも慰撫され服従する異民族はもちろんのこと、戦い征伐すべき対象であっても、自国の朝廷がその異民族に対して優位にあってこそ詩に詠われるのであり、その優位性が失われた東晋以降、現実としての異民族を詩に詠うのが難しくなっていたのだと考えられる。東晋以降、実際の異民族が詩に詠われる場合、戦に敗れたり、都やその周辺が蹂躪されたり、異民族の兵を恐れたりするような描写ばかりである。こういった現実に対し、南朝の詩人たちは楽府などの仮構の世界において、異民族を討伐せんとする気概、あるいは願望を詠うしかなかったのだろう。その結果、汎称を用いたイメージとしての

異民族が多く描かれるようになったのである。

本稿では「蛮夷戎狄」および「虜」を中心として取り上げたが、その他、最初に述べたように異民族の汎称としては「胡」があり、また個別の異民族を表す語としては「獫狁」「匈奴」「鮮卑」「羯」「羌」「氐」などがある。これらは今回取り上げた詩の中にもしばしば見られたが、今後はこういった語についても検討を加え、六朝詩における異民族の描かれ方についてさらに考察を深めていきたい。

## 【注】

〔1〕本稿では「異民族」という表現を用いているが、当時から民族という意識があったわけではない。渡邊義浩は「両漢における華夷思想の展開」（『両漢儒教の新研究』（汲古書院二〇〇八）、後『後漢における「儒教国家」の成立』（汲古書院二〇〇九）に所収）において、華夷の別は、種族によるものではなく、道義の有無や習俗・制度などの文化的概念により規定されるという。本稿でもこれに従い、制度・文化的に劣ると見なした相手を「蛮夷戎狄」や「虜」で表現したものと考える。

〔2〕『楚辞』九章・涉江「哀南夷之莫吾知兮、且余濟兮江湖」、司馬相如「喻巴蜀檄」（『文選』卷四四）「南夷之君、西楚之長、常效貢職、不敢擅怠」、司馬相如「難蜀父老」（『文選』卷四四）「今又接之以西夷、百姓力屈、恐不能卒業」、漢武帝「元封元年冬十月詔」（『漢書』武帝紀）「南越東甌咸伏其辜、

西蛮北夷頗未輯睦」、司馬遷『史記』匈奴列伝「居于北蛮、随畜牧而转移」等。

〔3〕白鳥庫吉「周代の戎狄に就いて」（『東洋學報』第十一卷二号 一九二四）参照。

〔4〕古くは「古詩十九首・其一」（『文選』卷二九）に基づき、故郷を懐かしむ例えとしての「胡馬」や、遠く隔たることを意味する「胡越」、あるいは異国の女性をいう「胡姬」など、詩に用いられる「胡」の語は非常に多岐にわたる。よって六朝詩に見る「胡」については、稿を改めて論ずる予定である。

〔5〕例えば班固「東都賦」（『文選』卷一）に「内撫諸夏、外綏百蛮。……四夷間奏、徳広所及、僭休兜離、罔不具集」とあり、張衡「東京賦」（『文選』卷三）には「宣重威以撫和戎狄、呼韓來享」とある。班固「東都賦」の「四夷間奏」とは、四方の異民族の音楽が代わる代わる奏でられることで、それにより天子の徳が広く及んでいることを示している。また張衡「東京賦」の「呼韓」は匈奴の單于の名である。

〔6〕『後漢書』西南夷伝に引く益州刺史朱輔の上疏文に「今白狼王唐敢等慕化帰義、作詩三章。……遠夷之語、辞意難正。草木異種、鳥獸殊類。有健為郡掾田恭与之習狎、頗曉其言、臣輒令訊其風俗、訳其辞語」とあり、そこに引かれるこれらの歌の各句の下に文意不明のやや小さな字が付されている。「蛮夷貧薄」の下には「儂讓龍洞」の四字が、「蛮夷所処」の下には「儂讓皮尼」という四字があり、これらは異民族の原語の音に漢字を当てたものと思われる。ここから「蛮夷」の原語（の音）は「儂讓」と推測されるが、それ以上のこと

は明らかではない。

[7]『尚書』禹貢では、王城から離れること五百里ごとに「甸服」「侯服」「綏服」「要服」「荒服」と区分し、「要服」に「夷」「荒服」に「蛮」がいるとする。

[8]王先謙『漢書補注』巻十四に「王制、西方曰戎。高帝西都、先安撫之」という。

[9]『漢書』礼楽志に引く「郊祀歌十九章・后皇」に「沈沈四塞、假狄合処」<sup>14</sup>という「假狄」の語がある。顔師古は「假狄、遠夷也」と言うが、王先謙補注では、「狄、即逖之消。詩、舍爾介狄。説文、狄作逖。毛伝、狄、遠也。注作遠夷解非」と述べる。『尚書』多士に「移爾遐逖比事」とあることから、本稿では「假狄」は遠い地と解し、異民族とは取らない。

[10]班固『東都賦』「内撫諸夏、外綏百蛮」、司馬相如『封禪文』(『文選』巻四八)「諸夏樂貢、百蛮執贄」等。

[11]佐藤大志・釜谷武志・佐竹保子・柳川順子・林香奈・狩野雄「訳注『宋書』楽志二訳注稿(一)」(『未名』三七号 二〇一九)を参照。

[12]現行の『宋書』には「晋鼙舞歌」の作者名は記載されていないが、蘇晋仁・蕭煉子校注『宋書楽志校注』(齐鲁書社 一九八二)では『楽府詩集』巻五三により作者名「傅玄」を補っており、本稿でもこれに従う。

[13]「老子化胡説」および「老子化胡経」については、桑原隲藏『老子化胡経』(『桑原隲藏全集』第一巻『東洋史説苑』(岩波書店 一九六八)所収)、長島優『老子化胡経』について『佛教文化学会紀要』二〇〇〇巻九号、二〇〇〇を参照。

侯景の乱の残党を指すとも考えられる。

[18]范雲の詩の「安夷」県は、『後漢書』郡国志五によると涼州金城郡に属し、『晋書』地理志上によると涼州西平郡に属す。

「和戎」県は、六朝時代には確認できないが、『隋書』地理志上によれば、北周の時代に梁州宕昌郡(甘肅省隴南市)に和戎県が置かれたとあり、梁代に同様の県名があった可能性は十分考えられる。また元帝の詩の「破虜」は將軍号であり、古くは後漢の光武帝劉秀が更始帝より「破虜大將軍」に封じられ(『後漢書』光武帝紀上)、その後、董卓(『後漢書』董卓伝)、孫堅(『三国志』呉書・孫破虜伝)らが「破虜將軍」となっている。

[19]竹田龍兒は「侯景の乱についての一考察」(『史学』二九巻三号 一九五六)において、「梁人は彼を呼ぶに戎だの羯だの虜だのゝ語を以てしている。…〔略〕…以上の諸資料から判断するに恐らく彼は羯種かなんかに属する北族の出身者であったものと思う。彼の率いる精兵も『皆羌胡雜種』であったと陳書殷不害傳は傳えている。」(原文ママ)と述べる。

[20]梁・沈約『懷旧詩・傷韋景猷』(『芸文類聚』巻三四)にも「韋景猷前載、博物備戎華」と言い、「華戎」ではなく「戎華」の語がある。これは韋景猷が「戎華」のあらゆることを知るほど博識であったと称えており、やはり国の内外という意味で解釈できよう。

[14]『論語』馬融注には「九夷、東方之夷有九種」という。漢の人である馬融はおそらく『礼記』の「東夷」「東方曰夷」から、「九夷」を東方にある九種の異民族と解したのであろうが、孔子自身が東方を意識していたかどうかは定かではない。また先に挙げた漢代の詩に見る「九夷」にも方角性は見られない。孔子はあくまで一般には「鄙」とされる辺境の地を「九夷」とし、君子がそこに住めば「鄙」ではないと述べるだけである。欧陽建の詩ではおそらく韻字であるため「九蛮」とするのであろう。

[15]張華『晋四箱楽歌十六篇・食举東西箱楽詩十一章・其九』(『宋書』楽志二)に「干戚舞階庭、疏狄悦遐荒」といい「疏狄」の語があるが、この「狄」も注⑧と同様、本稿では「逖」(遠い)に通ずると解しておく。『史記』司馬相如列伝に「疏逖不閉」とあり、索隠に「逖、遠」という。

[16]李陵『答蘇武書』(『文選』巻四一)「挙刃指虜、胡馬奔走。……以單車之使、適萬乘之虜」、『史記』李將軍列伝「自負其能、数与虜敵戦、恐亡之。……虜多且近、即有急、奈何」等。

[17]この詩は『芸文類聚』は昭明太子の作とし、『古詩紀』は秦漢魏晋南北朝詩も同じであるが、ともに疑義を挟む。『古詩紀』は、『南史』によれば梁代に「晋熙王」は無いため『芸文類聚』の誤りではないかという。また逖欽立は、詩の内容から侯景の乱以後の作とし、この時昭明太子はすでに亡く、元帝蕭繹が江陵で帝位についていた時、簡文帝の子蕭大圜を「晋熙王」に封じたという『周書』の記述から、元帝の作であると指摘する。もしそうであるならば詩にいう「辺戎」とは、